

「 経営管理情報分析サポートシステムでの分析処理事例管理 」

4N-4

富士通エフ・アイ・ビー株式会社 新井 淳

1. はじめに

「SIS (Strategic Information System : 戦略情報システム)」という用語も一般的になりつつあるが、なかでも経営戦略へのアプローチが注目されている。小売業界向けに、売上管理実績や経営管理などの基幹業務システムから得られる情報を、経営トップや企画部門、マーケティング担当部門が自らの操作により希望の資料を作成・入手できる「経営管理情報分析サポートシステム」を構築した。

当システムの拡張・充実を目的として、分析処理事例の分析をおこなう診断システムとして位置付けた機能について述べる。

2. システム開発のへの姿勢

「経営管理情報分析サポートシステム」のようなシステムは、従来のED

P (Electric Data Processing) システムとは違い、純粹に効率を追求するためのシステムではない。そのため、システム導入が即、効率化や利益の増加といった定量的な評価にはならず、その投資効果を直接定量的に評価することは難しい。いろいろな指標が考えられるが、ここではひとつの評価指標として分析処理の利用頻度からの評価分析を試みた。

経営管理分析に使用するためには

- ① 誰が利用するか (経営トップか、サポート部門か、情報システム部門か) ?
- ② どのようなデータベースから、どのような分析方法・体裁のアウトプットを提供するのか ?
- ③ 最終結果を出力するに至るまでの手続き (操作手順) は、メニューに沿った定型的処理か、また、試行錯誤的な非定型的分析処理か ?

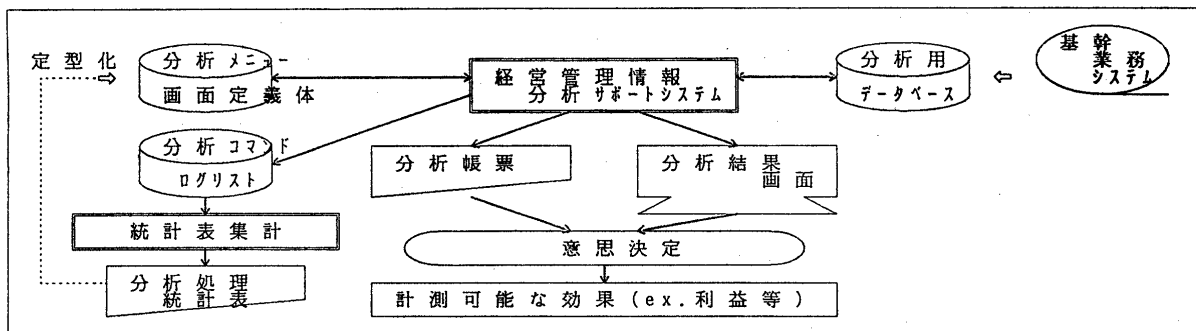


図1. システム概要

どの要件が、システムの構造を検討する上で重要な影響を及ぼす。

3. 分析処理事例の管理方法

本システムでは、経営分析における作業として、月次報告書資料の作成といたった定型的な分析処理を基本メニューとして初期のシステムをプロトタイプとして提供した。さらに、モデルシミュレーションなどの単発的な非定型的な分析に対しても、本システムのベースとした統計解析パッケージ(「TRACT」)をコマンドレベルで使用して処理履歴を蓄積し、活用ニーズが高い場合には基本メニューに追加できるようにした。

システムの柔軟性を考慮するため、以下の点に留意した。

- ㉑ 定型処理メニュー構造の融通性
- ㉒ 定型メニュー利用状況の統計管理
- ㉓ 定型分析処理以外の分析切り口の発見の容易さ
- ㉔ 分析用データ利用状況の統計管理
- ㉕ 分析用データベース構造のメンテナンス性
- ㉖ 同一分析処理結果自体の時系列追跡を可能とする
- ㉗ 管理資源(データベース容量、処理コスト、処理レスポンス等)の効率性

特に、メニュー処理(定型分析)における利用状況、および、非定型分析における分析コマンド利用履歴に着目し、表1に示す項目について処理事例(コマンドログ)を統計分析することとした。

表1 分析コマンドログリストファイルにおける取得情報

定型分析処理履歴
・各メニューIDの選移 ・オプション選択項目
非定型分析コマンド処理履歴
・参照DB名、のドラオ ・テーブル名、のドラオ ・分析プログラムメ
集計キー項目
・利用部門組／個人ID等) ・利用時期(月、旬、週) ・利用用途／目的

4. おわりに

分析コマンドログリストファイルから分析内容の“分析”をおこない、データベースの利用情報や、分析処理内容の利用頻度等についてを統計分析をおこなった。その中で、当初非定型処理であるとされていた分析が実は定型的におこなわれていたことが判明し、定型メニュー化とすることによる分析処理作業の効率化の実現や、データベース構造や処理手続きの変更による分析システムの改善に効果がみられた。今後の課題として、分析コマンドログリストからの定型メニューの更新作業までをおこなえるツールの開発について検討したい。

5. 参考文献

1. エレクトロマーケティング
荒川圭基、ダイヤモンド社、1989
2. 全社システム計画技法 E P G II
富士通株式会社、1988